
シンポジウム

存在と知性

—イスラームから西洋へ—

司会 新潟大学 山内志朗

提題 イスラーム哲学の転換点

東京学芸大学 小林春夫

提題 トマス・アクィナスによる異文化
理解

広島大学 水田英実

(於 新潟大学 2003.10.26)

司 会

山 内 志 朗

西洋中世哲学、特に盛期スコラ哲学はイスラーム思想から大きな影響を受けた。いやそれだけでなく、「輸入の産物」であると語られる場合もある。その正否はともかく、その影響関係に以前よりも大きな関心が向けられていることは事実である。本邦において、西洋中世思想研究は着々と蓄積されつつあり、また、中世イスラーム思想についての研究者も増えてきた。過去と現在の双方において、両者は結びついていると言える。

盛期スコラ哲学の世紀、十三世紀というのは、西欧において、多分西洋中世とイスラームが絡まり合って成立している時期と整理できる。ただ、十三世紀後半以降、新たなイスラームの流入はほぼ断絶してしまう。なぜ途絶してしまうのか、それはそれぞれの文化圏のみならず、世界史的な視点が必要なのだろう。

ところで、二十一世紀の幕開けが、9.11に代表される、きわめて衝撃的な仕方でのイスラーム顕現であったことは、記憶に真新しい。この出来事の意味をどのように捉えようと、イスラームとの間の豊かで激しい対話の必要性が明白すぎる事実として

現れるようになった。

さて、今大会には、ロンドン大学のチャールズ・バーネット教授が参加され、昨日 Recent Development in the Study of Arabic Philosophy and its Impact on the West という特別講演を行った。その翌日となる本日のシンポジウムにおいても、イスラームが主題化されている。テーマは「存在と知性——イスラームから西洋へ」である。

本シンポジウムの「存在と知性」というテーマの意味は、必ずしも合意した解釈があるわけではなく、私見となるが、その意図をくめば、十三世紀西洋中世哲学を、存在と知性という二つのキーワードを通して集約しようということではないだろうか。特に、イスラームのアラビア語文献が翻訳され、批判的受容が盛期を迎えていた十三世紀においては、両概念が中心になっていったと思われる。

アヴェロエス（イブン・ルシュド）のアリストテレス諸註解、そしてアヴィセンナ（イブン・シーナー）の『治癒の書』における形而上学、靈魂論にあたる部分がラテン語訳され、典拠として大きな位置を占めることになった。批判的な視点に立ったアルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス、受容の側面が強い思想家としては、オーヴェルニュのギヨーム、ブラバンのシゲルス、ガンのヘンリクス、ドゥンス・スコトゥス等々が挙げられる。もちろん、イスラーム思想といえども一枚岩のものではないのだが、十三世紀の西洋においては、ガザリーとアヴィセンナの思想が同一のものとして捉えられていることに見られるように、截然たる相において捉えられていたわけではない。

アラビア語からラテン語への翻訳も断片的かつ断続的になされ、テキストの流通もままならない状況では、イスラーム哲学受容も遅々たるものとならざるをえない。しかも、その過程の研究は未踏査の部分も大きいし、また受容の地域的広がりとその進展の様子になると、かなり複雑な事態にならざるを得ない。

しかし、こういった領域に対する研究が進まなくては、特に十三世紀後半の哲学研究も不十分なものとなるしかないと思われる。

今回のシンポジウムでは、特にイスラームから西洋中世への影響の過程に主眼が置かれる。中世哲学会において、両者の関係が主題化されるのは今回が初めてのはずである。両者の影響関係の解明にとどまらず、内在的研究における新たな問題構制への端緒が開かれることをここで期待して、シンポジウムを始めたい。
